

アダム・スミス価値論の

原理的性格について

嶋田力夫

序

周知のように、スミスの価値論は『諸国民の富』第一編において、まず分業論が論じられ（第一―三章）、ついで貨幣論（第四章）を媒介ないし補論としたのちにおいてはじめて、第五・六・七の三つの章を通じて展開されることとなっている。

すなわち、それは、分業が徹底しておこなわれる社会としての（商業社会(Commercial society)）(W. o. N. vol. I, p. 24. 訳(一三三頁))——彼にあつては、マニファクチュア内の分業と社会的分業とを明確に区別することなく、分業一般としてとらえ、しかも彼のもっぱらの関心は事実上社会的分業にあつたため、その社会は即商品生産社会を意味していた——になると、物々交換の困難をさけるために貨幣が「商業の普遍的用具」(ibid. vol. I, p. 29. 訳(一四六頁))となり、そしてこのような貨幣を媒介として行われる商品交換において「人々が自然にまもる諸法則」(ibid. vol. I, p. 30. 訳(一四六頁))つまり「諸商品の交換価値を規定する諸原理」(ibid. p. 30. 訳(一四七頁))を究明しなければならない、とし

て彼は次の三つの問題を定めるのであった。

「第一に、この交換価値の実質的尺度 (measure) とはどのようなものであるか、すなわち、すべての商品の実質価格 (real price) はどのようなものに存するか」

「第二に、この実質価格は、どのようなさまざまな部分から構成されているか、つまりなりたっているか」

「そして最後に、価格のこれらのさまざまな部分のあるものまたはすべてのものを、ときには自然率または通常率 (natural or ordinary rate) 以上に高め、またときにはそれ以下にひきさげるさまざまな事情はどのようなものであるか、すなわち、市場価格 (market price) いいかえれば諸商品の実際価格 (actual price) が、それらの商品の自然価格 (natural price) とよばれるべきものと正確に一致するのをさまたげるさまざまな原因はどのようなものであるか」(ibid. p. 30. 訳(一四八頁))と。スミスが定めた右の三つの問題がとりもおさず、それぞれ第一編第五・六・七章の課題とされ、そして、それぞれの問題がそれぞれの章で詳細に展開されることとなっている。すなわち、このような三つの章において

スミス価値論の骨格が基本的に与えられる関係になっているのである。したがって、われわれは、この三つの章にわたって展開されているスミスの価値論そのものがいったいどのような関連のもとで、どのように展開される関係となっているか、その内的論理を究明しつつ、それがスミスの理論体系にとってどのような意義と限界をなすものとして存しているか、すなわち、その原理的性格を基礎的に明らかにしておきたいと思う。(注)

(注) このスミス価値論の原理的性格の解明にとって、基本的に正しい視座を措いたものとして、マルクスによる周知の次のようなスミス評価がある。「スミス自身は非常に素朴に、たえまない矛盾のなかを動揺している。一面では、彼は経済的諸範疇の内的関連を、すなわちブルジョアの経済体制の隠された構造を追求する。他面では、彼は、これとやらんで、競争の諸現象のうちに外観上与えられているとおりの関連を、したがってまた、実際にブルジョアの生産の過程のうちにとらわれてそれに利害関係をもつ人とまったく同様の、非科学的な観察者に対して現われるとおりの関連を、併置している。この二つの把握方法——そのうちの一方は、ブルジョアの体制の内的関連のうちに、いわばその生理学のうちに、突入するものであり、他方は、ただ、生活過程のうちに外面的に現われるものを、それが現われ現象するとおりに、記述し、分類し、物語り、そして図式的な概念規定を与えるにすぎないものであるが——、この二つの把握方法がスミスのばあいには、平気で並存しているだけでなく、入り乱れて、絶えず矛盾しあっている」(Mw. Bd. II, S. 162. 訳四二八九頁)。

あるいはまた、「それは主として——とマルクスは言う——商品価値一般にかんする彼の『科学的』(scientific) 見解が、皮相的 (exoteric) 見解とたえず交錯させられているからである。だいたい彼においてはこの皮相の見解の方が優勢なのであって、ただ彼の科学的本能がときどき科学的な立場を再現させているにすぎない」(K. Bd. II, S. 380. 訳四九二—三頁)。

みられるように、マルクスはここで、スミスの理論体系が「ブルジョア的体制の内的関連——生理学——に突入」している側面としての「科学的な」把握様式と「生産過程のうちに外面的に現われるものをそれが現われ現象するとおりに記述し、分類し、物語る」側面としての「皮相的な」把握様式との、いわ

ば二面分割的な体系であるとし、しかも両者はただ単に二面的に分割され、並存しているばかりではなく、「入り乱れて、絶えず矛盾しあっている」ものとするのである。そして、このような性格規定にもとづいて、前者——「科学的な」把握様式——の側面を、後者——「皮相的な」把握様式——から機械的に分離し、かつそのみに着目し、そして、そこにみれる経済学的諸範疇——価値、価格範疇及び剰余価値範疇等々——がどこまで「科学的な」規定たりえているかの検討を通じて経済学史上におけるスミス経済学の意義と限界を確定しようとするのである。

たしかに、スミスの理論体系は、体系そのものとしても、また経済学的諸範疇そのものを取り上げてみても二面的ではある(いかに二面的であるかについては後に詳述する)が、しかし、スミスにみられるこの二面的な把握様式をマルクスの如く機械的に分離し、しかも両者は「平気で並存しているだけでなく入り乱れて、絶えず矛盾しあっている」ものとしてしまえば、スミスの理論体系そのものも二面分割的な体系として放置されてしまえばかりではなく、「入り乱れて、絶えず矛盾しあっている」ものとしてしか理解しえないことになる。だが、このようにスミスの理論体系をただ単に二面分割的な体系であるとする理解からは、経済学が「諸国民の富」によつてはじめてその理論的体系化が可能とされたとする指標そのもの、つまり「諸国民の富」の理論的部分がスミスなりに一応統一的な体系構成をもちえたということ、さらに言いかえれば、スミスなりに把握されたところの労働による価値規定が彼の理論体系そのものの基核に、土台となる関係をもつにいたったということを理解する道はまったくとざされることとなり、したがって、このような方法的視点によつては真にスミス経済学を評価することにはなりえない。だから、われわれとしてはスミス価値論の二面性を、マルクスのごとくただ単に指摘するのみにとどまることなく、後に詳述することく、さらにその重層的に着目し、それがいかにスミス理論体系そのものを重層的なるものとしているかについて、明確にすることこそが重要であらう。

※なお、煩雑を避けるため、基本的な引用文献は次のように略記した。

M. o. N. —「諸国民の富」(大内・松川訳・岩波文庫版)；K. —「資本論」(長谷部訳・青木文庫版)

My.——『剰余価値学史』(岡崎・時永訳、国民文庫版)
Kt.——『経済学批判』(武田他訳、岩波文庫版)

第一節 価値把握の重層性

——第一編第五章の検討——

〔一〕 周知のように、第一編第五章は「諸商品の実質価格および名目価格について、すなわち、それらの労働価格および貨幣価格について」という標題のもとに、諸商品の交換価値の実質的尺度 (measure) とは何か、つまり、すべての商品の実質価格 (real price) とは何かが考察されている。そして、この問題に対するスミスの基本的観点は、これもよく知られているように、冒頭の三つのパラグラフによって与えられているものとみることができ。マルクスの『剰余価値学史』以来、多くの論者によって論じられている箇所でもあるが、われわれも後論との関係上、少々長きにわたるが引用しておこう。彼はその冒頭で次のように言う。

(1) 「あらゆる人は、その人が人間生活の必需品・便宜品および娯楽品をどの程度に享受できるかに応じて、富んでいたり、まじりかたりするのである。ところで、いったん分業が徹底しておこなわれると、一人の人間が自分自身の労働で充足しうるところは、これらのうちのごく小さい一部分にすぎない。かれはそのほか大部分を他の人々の労働からひきださなければならないのであって、かれは、自分が支配しうる労働の量、つまり自分が購買できる労働の量に依じて、富んでいたり、まじりかたりせざるをえないのである。それゆえ、ある商品の価値は、それを所有してはいても自分自身で使用または消費しようとは思わず、そ

れを他の諸商品と交換しようと思っている人にとっては、その商品がその人に購買または支配させうる労働の量に等しい。それゆえ、労働はいっさいの商品の交換価値の実質的尺度なのである。」

(2) 「あらゆる物の実質価格 (real price)、つまりあらゆる物がそれを得ようとする人に現実についてやさせるものは、それを獲得するための労苦や煩勞である。それを獲得して売りさばいたり、他の物と交換したりしようとする人にとって、あらゆる物が現実になれほどの値があるかといえば、それはこの物がその人自身に節約させうる労苦や煩勞であり、またこの物が他の人々に課しうる労苦や煩勞である。貨幣または財貨で買われるものは、われわれが自分自身の肉体を労苦させることによって獲得できるのとちょうど同じだけの労働によって購買されるのである。実に貨幣または財貨は、この労苦をわれわれからはぶいてくれる。これらの貨幣または財貨は、一定量の労働の価値をふくんでおり、われわれはそのとき、それらを等量の価値をふくむと思われるものと交換するのである。労働こそは、最初の価格、つまりいっさいの物に支払われた本源的な購買貨幣 (original purchase-money) であった。世界の間いっさいの富が本源的に購買されたのは、金または銀によってではなく、労働によってであって、富を所有している人々、またそれがある新しい生産物と交換しようとする人々にとってのその価値は、それがそういう人々に購買または支配させうる労働の量に正確に等しいのである。」

(3) 「ホブズ氏 (Mr. Hobbes) がいうように、富は力 (power) である。けれども、大財産を獲得したり、相続したりする人は、必ずしも市民または軍人としての政治力を獲得したり、相続したりするとはかぎらない。かれの財産は、おそらくはその両者を獲得する手段をかれにあた

えはするであろうが、この財産をただ所有しているというだけでは、必ずしもそのいずれかがかれにもたらされるとはかぎらないのである。その所有が、ただちに、しかも直接にかれにもたらす力は、購買力、すなわち、そのときその市場にあるいっさいの労働またはいっさいの労働生産物に対する一定の支配である。かれの財産の大小は、この力の大きさいいかえれば、その財産がかれに購買または支配させるところの、他の人々の労働の量か、またはこれと同一のことであるが、他の人々の労働生産物の量か、のいずれかに正確に比例する。あらゆる物の交換価値は、それがその所有者にもたらすこの力の大きさいにつねに正確に等しいにちがいないのである。」(W. o. N. vol. I, p. 32-33. 訳)一五〇—五二頁。

みられるように、スミスはまず(1)パラグラフにおいて、分業が徹底しておこなわれるいわゆる「商業社会」にあっては、各人は自分の必要とする商品の大部分を「他の人々の労働からひきださねばならない」ので、各人の貧富は各人が「支配しうる労働の量、つまり自分が購買できる労働の量」によってきまるものとする。それゆえ、ある商品の価値は「それを所有してはいても自分自身で使用または消費しようとは思わず、それを他の諸商品と交換しようと思っている人にとっては、その商品がその人に購買または支配させうる労働の量に等しく、それゆえにまた、「労働はいっさいの商品の交換価値の実質的尺度」であるとする。すなわち、スミスはここで、商品の交換価値の実質的尺度を労働にもとめ、そしてしかもその労働は、ある商品が交換において購買し、あるいは支配しうる他人の労働量、すなわち「支配労働量」であるとするのである。この規定が一般に支配労働価値説とよばれるべきものであるが、しかし、スミスがこの支配労働

量による価値の規定を唯一のものとして終始一貫『諸国民の富』の理論体系の基底にすえているのであるかといえは、けっしてそうではなく、他面では、このような価値規定とはまったく相反する仕方において価値を規定するのである。すなわち、彼は先に引用した(2)パラグラフにおいて、「あらゆる物の実質価格 (real price)、つまりあらゆる物がそれを獲得しようとする人に現実についやさせるものは、それを獲得するための労苦や煩勞」であり、「あらゆる物が現実にとれほどの値いがあるかといえは、それはこの物がその人自身に節約させうる労苦や煩勞であり、またこの物が他の人々に課しうる労苦や煩勞」である、とするのである。つまり彼がここでいう交換価値の実質的尺度としての労働は、先の「支配労働量」とはまったく異なっており、その商品の生産に要した労働量、すなわち、いわゆる「労苦や煩勞」としての「投下労働量」であると規定するのである。そして、この規定が一般に投下労働価値説とよばれていることについてはすでによく知られている通りである。

ところでこのように、スミスは第一編第五章の冒頭において、商品の価値を支配労働量と投下労働量というまったく相反する仕方と規定することとなっているのであるが、しかし、この両価値規定は、マルクスが指摘したように、前者を「皮相的な」もの、後者を「科学的な」ものとして機械的に分離してとらえ、しかも、このようにしてとらえられた両者が「たえず入り乱れて矛盾しあっている」ものとしてとらえられうるであろうか。あるいはまた、両者は、ただ単に「並列」されているにすぎないものとしてあるであろうか。

(註) 両価値規定の関連について、マルクスの見解にまったく依拠して展開しているものとして、代表的には岡崎栄松氏の『資本論研究序説』(日本評論社、一九

六八年」をあげることがきる。また、両価値規定がただ単に、「並列」されて
いるにすぎないものとする見解については、代表的には、藤塚知義氏の『ア
ム・スミス革命』（東大出版会、一九五二年）にみられる。このような見解が
いかに誤っており、不十分な理解であるかについては、行論の展開のうちにし
めすであらう。

ところで、両価値規定の関連がいかなるものとしてとらえられるかを
明らかにするにあたって、もう少しスミスの言うところを聞いてみよう。

すなわちスミスは、先にもみたように、まず、商品の価値を「その商品が
その人に購買または支配させうる労働の量」に等しいものとし、支配労働
量による価値の規定をおこなったのであった。そしてこの規定は、スミス
にあっては、分業が徹底され、各人は自分の必要とする商品の大部分を
「他の人々の労働からひきださねばならない」ような「商業社会」におい
てはじめて規定しうるものとされたのであった。したがって、この支配労働
価値説は、諸商品の交換の側面において、つまり、商品所有者が相互に
自己の商品を交換しあうという、いわば商品所有者相互間の社会的関連そ
のものから抽象してえられた規定であるといつてよい。ところが、この規
定のみでは、商品所有者が実際にどれだけのものを「購買し支配しうる」
こととなるかについては、つまり、その量的関係そのものについては、不
分明なままである。そこで、スミスはさらに論歩をすすめて、その商品が
「購買し、支配しうる労働量」は実際にいくばくであるかを、つまり、そ
の量的関係を追及する。そして、それは、その商品を「獲得するための労
苦や煩勞」、つまりその商品を「生産するに必要な労働量」によって規制
されるものとするのである。いいかえれば、諸商品が「購買し、支配しう
る労働量」の關係は、その商品の「生産に投下された労働量」を基礎ない

し前提とすることによって、はじめて成りたちうるものとなっているので
ある。

ここにわれわれはひとまず、スミスの敘述を追認するかたちにおいてで
はあるが、両価値規定がただ単に「入り乱れて交錯」しているものではなく、
また「並列」しているものでもなく、投下労働価値説を基礎ないし前
提とし、それを支配労働価値説で補完するという関係においてつかまれて
いることをみてとることができよう。しかしそれは、あくまでスミスの敘
述を追認するかぎりにおいてであって、けっして充分な関係において論証
されたものではない。というのは、支配労働価値説とはまったく相反す
る投下労働価値説がなぜ支配労働価値説の基礎ないし前提としておかれ
ているのか、その内的ロジックの究明がなされていないからである。そ
こで、われわれは、この関連を、支配労働価値説の基礎ないし前提とされ
ている価値の実体としての投下労働そのものが、スミスにあってはいかな
る性格をもつものとしてつかまれているかの検討を手がかりとしつつ、み
てゆくことにしよう。

〔二〕 われわれはまず、先に引用した②パラグラフにおいて、「あらゆる
物の実質価値 (real price)、つまりあらゆる物がそれを獲得しようと欲す
る人に現実についてやさせるものは、それを獲得するための労苦や煩勞」と
して、つまり、それらの諸商品を「獲得して売りさばいたり、他の物と交
換したりしようと欲する人にとって、あらゆる物が現実にとれほどの値
いがあるかといえ、それはこの物がその人自身に節約させうる労苦や煩勞
であり、またこの物が他の人々に課しうる労苦や煩勞」としてとらえられ
ている点に、さらにはまた、「等量の労働は、いっどのようなところでも

労働者にとっては等しい価値」(W. o. N. vol. I, p. 35. 訳(一五五頁)をもち、「かれの健康・体力および精神が平常の状態で、またかれの熟練および技巧が通常程度であれば、かれは自分の安楽、自分の自由および自分の幸福の同一部分をつねに放棄しなければならない」(ibid., p. 35. 訳(一五六頁)ものとして把握されている点に、注目しなければならない。

ここにおいて端的にあらわされているように、彼は、諸商品の価値の実体としての投下労働そのものを、当初から「労苦や煩勞」、「安楽と自由と幸福の犠牲」としてとらえることとなっているのである。だが、はたして価値の実体としての投下労働そのものをスミスのごとく、当初から「労苦や煩勞」、「安楽と自由と幸福の犠牲」としてとらえることができるであろうか。いうまでもなく、それは、本来的にはけっしてそのようなものとしてとらえられうる関係にはない。

諸商品の価値の実体としての投下労働そのものを、本来的な関係からみるならば、すなわち、いっさいの社会的形態および性格規定性を剥ぎとってみるならば、それは、人間が、みずからにもつところの労働力をもって自然に対して働きかける関係において、つまり、「いかなる特定の社会形態からも独立」したものとして抽象しうる「人間と自然との一過程」、すなわち「人間がその自然との物質代謝を彼自身の行為によって媒介し、規制し、調整するところの一過程」(K. Bd. I, S. 184. 訳(三二九頁)の基礎をなすものとして、さらに言いかえるならば、人間と自然とを媒介する生産活動一般として抽象しうるものである。したがって、投下労働そのものが本来的には社会存続の物質的基礎としての労働生産過程における労働として定在するかぎり、それはけっしてスミスのごとく当初から、「労苦や煩勞」、「安楽と自由と幸福の犠牲」としてとらえられるべきものではない。

く、「自由な生命の表出であり、したがって生命の享受」(Marx/Engels, Historisch-kritische Gesamtausgabe, Erste Abteilung, Bd. 3, Berlin, 1932. S. 547. 訳書『経済学ノート』杉原四郎・重田晃一訳、未来社刊一八頁)として、つまり、いわゆる「正常な生命活動」(K. Bd. I, S. 51. 訳(一三二頁)として、とらえうべきものとしてあるといわねばならない。

しかし、だからといって、このようなスミスのな労働把握の生ずる社会的根拠がまったく存在しないのではない。むしろ、スミスがこのように、本来的には「正常な生命活動」としてとらえられうる投下労働そのものを、当初から「労苦や煩勞」、「安楽と自由と幸福の犠牲」として把握していたということは、一面で彼の偉大さを物語るものといえよう。なぜならば、このようなスミスのな労働把握が生ずるのは、実は、資本家的商品経済において特有にみられる労働の存在様式——つまり、あらゆる社会に共通する自然と人間とのあいだにおける物質代謝の過程がすでに商品として自己の労働力を資本家に売り渡した賃銀労働者の労働によっておこなわれ、賃銀労働者にとっては自己の労働がすでに他人の労働、資本家の労働でしかないというような存在様式——においてであり、したがって、スミスが投下労働そのものをかかるとして当初からとらえていたということは、事実上、彼が資本家的商品経済に特有にみられる労働の存在様式——賃労働——を対象とし、それを一面で把握していたものであるといえるからである。

それでは、スミスは対象を、すなわち資本家的商品経済に特有にみられる労働の存在様式を、特殊歴史的な形態規定性においてとらえていたといえるのであろうか。いうまでもなく、それは、けっしてそうではない。

それは、あくまで、彼なりに、独自のものとして把握していたものといわねばならない。

先にも指摘したように、諸商品の価値の実体としての投下労働そのものは、本来的な関係からみるならば、社会存続の物質的基礎としての労働生産過程における労働として定在するものであり、そして、そのようなものとしてあるかぎり、それは同時に、人間の類的本質にもとづく社会的性格を具有するものである。つまり、個々の労働は、種々質的に異なる具体的有用労働としてありながら、全体としては社会的分業の体制をもって編成されている社会的総労働を形成するものとしてある。いいかえるならば、個々の労働は、この社会的総労働の一可除部分として全面的に相互に依存しあうという、社会的性格ないし社会的意義を有するものとしてある。そして、このような社会存続の物質的基礎としての労働生産過程における労働の本来的に具有する個別的な性格と社会的性格とは、スミスが事実上対象としていたところの資本家的商品経済においてはいかなる関係としてあるかといえ、それはまったく対立的な関係としてあらわれることとなる。すなわち、前者の側面は商品の使用価値——生産物の社会的交換によって他人のためのものとなる使用価値——を形成する労働としてあらわれ、他面、後者の側面は商品の価値として、労働生産物という諸物の社会的関係のうちのみ、いいかえるならば、諸商品の価値関係という対象的・物的形態を通じて、個々の生産者の背後で社会的な客観的な同質化がおこなわれる関係においてあらわれることとなるのである。したがって、このような側面からスミスの労働把握を照射するならば、彼が支配労働価値説の基礎ないし前提としていたところの価値の実体としての投下労働そのものを、当初から「労苦や煩勞」、「安楽と自由と幸福の犠牲」としてとらえて

いたということは、それはとりもたず、「社会的過程が同質でない労働のあいだで強力に遂行する客観的な同質化を、個人的諸労働の主観的な同格化」(Kt. S. 88 訳六八頁)としておさえていたことを意味するものにほかならない。いいかえるならば、それは諸商品の交換以前にすでにあらかじめ「労苦や煩勞」および「安楽と自由と幸福の犠牲」として個人主観的に同質なものとして、その商品に投下された労働はすでに社会的労働一般として設定され、同一量の労働は常に同一量の価値をもつものと規定されていたのである。だから、そこにおいては、私の労働は諸商品の交換以前に、すでに「労苦や煩勞」、「安楽と自由と幸福の犠牲」として個人主観的に同質なものとして前提され、そして、その後においてはじめて、その私の労働が他人の労働をどれだけ「購買ないし支配」することとなるか、あるいはどれだけに値いするかという関係において、その労働の社会的関係がとらえられてくることとなるのである。マルクスの言を借りるならば、スミスはまさに「私の労働は社会的労働としてのみ、それゆえ私の生産物は等量の社会的労働にたいする支配としてのみ、私の富を規定するという交換価値の概念」(Mw. Bd. I, S. 46—47 訳二一八頁)のとらえ方をしたのである。

したがって、スミスがこのような労働把握をするかぎり、そこにおいては当然のことながら、「価値において表示される労働を、その生産物の使用価値において表示されるかぎりでの同じ労働から、どこにおいてもはつきりとは、また明白な意識をもっては、区別していない」(Kt. Bd. I, S. 88 訳一八四頁)し、またできなかったのである。それと同時に、ある商品の価値はそれと直接的交換可能性の形態にある他の商品の使用価値によってはじめて自らの価値を表現しようという価値形態の理解も、彼にあ

つては「まったくどうでもよいもの・あるいは商品そのものの本性にとつては外的なもの」(K. Bd. I, S. 86. 訳(一八五頁))とされ、したがってまた、その貨幣把握もすでに一般的等価物となっている諸商品の交換を媒介するものとしてのみ、つまり流通手段としての機能としてのみとらえられることとなったのである。^(註)

(註) このようなスミスの独自の労働把握にもなつて、「価値形態の、かくして商品形態の、さらに進んでは貨幣形態・資本形態・等々の、独自性」(K. Bd. I, S. 86. 訳(一八五頁))が、つまり流通形態論の独自性がつかまれえかったという理論的欠陥をしめすこととなつたのであるが、このような理論的欠陥を招くにいたつた要因については、これまでしばしば、マルクス『資本論』冒頭での労働価値説の論証に関連して議論されてきている。

通説的な理解をしめすものとしては、次のような見解をあげることができ。すなわち、スミスが、ないしは古典経済学が流通形態論の独自性をつかみえないという理論的欠陥を招いたのは、まさに彼らが「実体的関連のうちに埋没して理解」(降旗節雄「流通形態論の基本構造」、北大『経済学研究』一三卷二号、六六頁)していたためであるとする見解である(このような理解をしめすものとしては他に、中野正「価値形態論」、日本評論新社刊、一二六—一三六頁、あるいはまた、大内秀明「価値の形態と実体」、明治学院大学論集『経済と歴史』五三頁、などがある)。このような通説的理解に対して、鎌倉孝夫氏は「労働力商品のもつ意味」(埼玉大『社会科学論集』一三三号)で、「価値形態論に先行して価値実体論をとく論理」(『資本論』冒頭における労働価値説の論証——引用者注)を古典経済学の「残滓」とするのには問題があるように思われる。……大体古典経済学には本来のいみの価値実体論はないのである。彼らは、むしろ価値形態に埋没していた」(二頁)として、真つ向から批判を試みておられる。さらに、この鎌倉氏の批判に対して大内秀明氏は、「価値論の形成」(東京大学出版会刊、一九六四年)で、「総じて古典経済学には、実体と形態との区別がない以上、真の意味の実体論がないばかりではなく、同じように真の形態論もないことは指摘するまでもない。そうした共通の欠陥のうえにそれにもかかわらず二つの労働価値説の対立と論争があったという事実が問題

なのである。われわれの問題意識は、まさにそこにあるのであって、そのために実体と形態との混同が投下労働価値説のばあいには、どちらかといえば形態を実体へ、支配労働価値説では実体を形態へ解消する傾向をここで指摘するのである」(二四五頁)として、反批判を試みられている。

たしかに、大内氏の言われるように、古典経済学は総じて「形態と実体との区別がない以上、真の意味の実体論がないばかりでなく、同じように真の形態論もない」のである。したがって、スミスないし古典経済学の招いた理論的欠陥をただ単に彼らが「実体的関連のうちに埋没」していたため、あるいは反対に「価値形態に埋没」していたためであると議論すること自体、一面的である。ましてや、大内氏のごとく、このような一面的な理解を正しく見すえながら、さらにその上、「どちらかといえば」というような情緒的な理解から、「実体的関連」ないし「形態の関連」への「埋没」関係を強弁してみたところで、議論をより一層不毛なものにするだけであろう。

このような一面的な議論を止揚するには、やはり、古典派、なかんずくスミスの価値論それ自体を、「実体的関連」ないし「形態の関連」へと「埋没」させる志向性において理解するのではなく、まさにスミスの価値論がそのような「埋没」関係に解消しえない内容をしめしているということ、それ自体をそのものとして、学説史の流れにおいてとらえるという理論的志向性をもつ必要があるように思われる。つまり、スミスの価値論がなぜ、両「埋没」関係に解消しえない内容をしめすこととなっているのか、その究極の理論的根拠はどこにあり、かつ、そのこともつ学説史上の意義ないし限界はどこにあるのか、という志向性において問題にすべきである。本稿の意図の一つは、まさに、このような内的ロジックの究明におかれているのである。

それでは、スミスはなぜ支配労働価値説の基礎ないし前提とされた投下労働そのものを、当初から「労苦や煩勞」、「安楽と自由と幸福の犠牲」としてとらえることとなつたのであろうか。つまり、なぜスミスは価値形態論の欠如、および貨幣把握の一面性という理論的代償をとまわざるをえなかった労働把握をしたのであろうか。この問題は、スミスがなぜ投下労働そのものをそのようなものとしてつかまえたのか、という問題のかた

ちに置きなすことができる。前者の問題は、後者のかたちをとるときにのみ答えうるものとなる。次にその点を明らかにしよう。

〔三〕 先の(2)パラグラフにおいてしめされているように、スミスはいわゆる二面的な価値把握の基礎的な関係に立たされている投下労働そのものを次のように規定していたのであった。すなわち、

「あらゆる物の実質価格 (real price)、つまりあらゆる物がそれを獲得しようとする人に現実についてやさせるものは、それを獲得するための労苦や煩勞である。」

「労働こそは、最初の価格、つまりいっさいの物に支払われた本源的な購買貨幣 (original purchase-money) であった」と。

みられるように、ここにおいて彼は、本来的にはあらゆる社会に共通する労働生産過程において定在する投下労働そのものを、「労苦や煩勞」としてあらかじめ個人主観的に同質なものとしてとらえていた反面、その労働を「本源的購買貨幣」としてもとらえることとなっている。われわれはこの点に、すなわち、彼が価値の実体としての投下労働そのものを「本源的購買貨幣」としてとらえている点に、注目しなければならない。

すなわち、スミスがこのように、本来的にはあらゆる社会に共通する労働生産過程において定在する投下労働そのものを「本源的購買貨幣」としてとらえていたということは、それはとりもなおさず、直接的生産者たる労働者が自己の労働を「本源的購買貨幣」として自然に対して支払い、その代価として「いっさいの生活必需品及び便益品」を、つまり使用価値物一般を自然から受けとるという関係においてとらえていたことを意味するものである。つまり、スミスはあらゆる社会に共通する自然と人間とのあいだにおける物質代謝過程——労働生産過程——を、自然と人間とのあい

だにおける商品交換の関係として、つまり、生産過程を交換過程化して、つかんでいたのである。いいかえるならば、このことは、彼が社会存続の物質的基礎としての労働生産過程を独自の一過程として析出しえずに、「資本による労働過程の領有を労働過程と取り違え」(マルクス「直接的生産過程の結果」、『資本論綱要』岩波文庫版所収、一五一頁)、たえず労働過程そのものに解消するかたちにおいて理解していたことをしめすものにはかならない。なぜならば、このように自然と人間とのあいだの物質代謝過程——労働生産過程——を商品交換関係として理解するスミスの把握そのものは、「資本による労働過程の領有」、つまり資本—賃労働関係の基礎の上において、社会の物質的基礎としての労働生産過程が資本家の支払う労賃と賃労働者の労働そのものとの交換関係として現象し、観念されるという現象形態そのものに共通するものであるからであり、したがって、スミスがこのような理解をしめしていたということは、資本—賃労働関係において表象にあらわれるがままの現象形態を、無媒介的に絶対化してとらえていたものといえるからである。

(註) このようにスミスがあらゆる社会に共通する自然と人間との物質代謝過程——

労働生産過程——を商品交換の関係としてつかんでいたとする理解は、すでに時永淑氏によって、その著『経済学史』(法大出版、一九七一年改訂増補版)二三〇—二三七頁において検討が加えられている。われわれも、基本的には時永氏の見解に負うものである。なお古くには、マルクスの労働価値説の論証の検討に関連して、宇野弘藏氏の次のような指摘がある。「アダム・スミスにとってはすでに最初から自然に対して働きかけて生産物を獲得する人間の行為自身が商品経済的に理解されていたのである。……マルクスにあつては勿論労働自身が価値を有するのではない。商品としての労働力は価値を有するが、労働自身は商品にはならない。労働は価値を形成しはするが、労働は労働の生産物ではない。自然に対して働きかける人間が、労働を自然に支払って生産物をそ

の代価として受けとるといふのは、商品経済を永久不変とするものである。アダム・スミスにしてもリカルドにしても価値の不変の尺度を求めて労働を得たのであるが、これは彼等の限界を示すものと云える。……価値を形成する労働をかけるものとして理解するということは、逆に商品経済から抽象して、これを一般的な人間対自然の關係に解消することではない。櫛田民藏氏の所謂価値人類犠牲説（櫛田民藏全集第二巻、一一六頁）はかかる方向を有するものといえるであらう。……抽象的人間労働がいかなる場合にも価値を形成するものと解するのは自然対人間の關係をも商品交換の關係と見るスミスの立場に逆転することになるのであって、マルクスの探るところではない」（『価値論』、一九四七年、河出書房版、一一二―一四頁）。さらにはまた、久留間鯨造氏によっても、その著『経済学史』（岩波全書版、一九五四年）において、「彼（スミス——引用者）は生産過程そのものを、賃労働と労賃との交換の關係から類推して歪曲した形で把握していたことが知られるのである。すなわち彼は、生産過程そのものをば人間と自然との間の交換の過程」（二〇〇頁）としてつかんでいたとの指摘がみられる。

したがって、スミスがこのように社会存続の物質的基礎としての労働生産過程を独自の一過程として析出しえずに、自然と人間とのあいだの商品交換の關係として交換過程化して、つまり資本―賃労働關係の基礎の上にあらわれるがままの現象形態を無媒介的に絶対化してとらえているかぎり、そこにおける労働把握自身も、本来的には「自由な生命の表出」であり「正常な生命活動」であるとする理解をしめすことができずに、外在化された・疎外された労働そのものを即、目的にとらえることとなり、したがってまた、それは当然のことながら、当初から「労苦や煩勞」、「安樂と自由と幸福の犠牲」として、個人主観的に同質なものとしてつかまざるをえなかったものといえよう。

かくてわれわれは、スミスがこのような独自の労働把握をなし、えたのは

いいかえるならば、価値形態論の欠如および貨幣把握の一面性という理論的代価をとまなざるをえない労働把握しかなしえなかったのは、その基礎に社会存続の物質的基礎としての労働生産過程を商品の交換關係として交換過程化して理解していたからであるということを取敢しうる。そして、まさにこの点に、われわれはその理論的、な根拠をみないわけにはいかないのである。

⑦ われわれはこのように、スミスの独自の労働把握の理論的根拠として、彼が人間と自然とのあいだの物質代謝過程そのものを商品交換の過程として、交換過程化して理解していた点にもとめたのであるが、それと同時に、彼の思想的側面からのアプローチも重要であるように思われる。時永淑氏も、その著『経済学史』（法大出版、一九七一年改訂増補版）で、「重商主義と対決したスミスの自然法的立場が、私的所有権の根拠を労働に見いだす見解に起因するものであって、『市民社会』の本質を、独立自由な『経済人』と『見る手』によって成立するものとして把握させたことが、そうした理解を生みだす根拠になっていることも見逃せない」（二三―二三頁）との指摘をおこなっておられる。われわれとしても、当然スミスの思想的側面からのアプローチを通じて補完しなければならぬのであるが、しかし、それはやはりおのずから本稿とは異なる独自の考察を要することになる。

〔四〕 ところで、われわれは、先に、スミスが社会存続の物質的基礎としての労働生産過程を商品交換の關係として、交換過程化して、把握しそしてこのことが、彼による独自の労働把握を根底から規制することとなっている点についてみてきた。しかし、このことは、ただ単に、スミスの独自の労働把握を規制しているばかりではない。このことはさらに、投下労働価値説を基礎とし、それを支配労働価値説で補完するというスミスのいわゆる二面的な価値把握それ自身も、彼にあっては、従来からしばしば議論されてきているように、なんら二面分割的でもなければ混同ないし交錯さ

れているものでもなく、あるいはまた、「並列」されているものでもなく、両者は矛盾することなく、まさに重層性において統一的に理解し説明しえた究極の理論的根拠ともなっていたのである。^(註)

(註) この点にかんする議論は、マルクス『剰余価値学説史』の次の一文の理解をめぐっておこなわれている。

「ここで(われわれが先に引用した第一編第五章の冒頭の三つのパラグラフで——引用者)強調されているのは、分業によってひきおこされた変化である。その変化とは、すなわち、富はもはやその人自身の労働の生産物のうちではなく、この生産物が支配する他人の労働の量、すなわちこの生産物が買いうる社会的労働量のうちに存するということ、そしてこの量は、この生産物そのものにふくまれている労働の量によって規定されている、ということである。……ここで強調されているのは、分業および交換価値によってひきおこされた、私の労働と他人の労働との等置、いいかえれば社会的労働の等置であつて(私の労働または私の商品にふくまれている労働もまた、すでに社会的に規定されており、その性格を本質的に変えているということとは、アダムには見落とされている)、けつして対象化された労働と生きた労働との区別や、その交換の特殊の諸法則ではない。事実上A・スミスがここで言っているのは、諸商品の価値はそれらにふくまれている労働時間によって規定されており、商品所持者の富は彼の自由になる社会的労働の量のうちに存する、ということにはかならない」(Mar. Bd. I, S. 467. 訳(一八—一九頁))。

右のマルクスの一文について、藤塚知義氏はその著『アダム・スミス革命』(東大出版会、一九五二年)において、次のように主張される。「通説が単純に『支配労働』価値説をもって誤れる規定となすのと反対に、マルクスは、むしろこの二つの規定の並列そのものの中に、価値を作る労働としての『一般的・社会的・労働』(『抽象的・人間的・労働』が事実上把握されていることを見ているのである)」「(三二頁)」と。ここで藤塚氏が、支配労働価値説を単純に誤まれる規定であるとする通説に対して支配労働価値説の意義を強調したという点は、氏の主張に一面の正当性があるにしても、しかし、スミスが投下労働価値説と支配労働価値説とを「並列」させて価値の実体たる「一般的・社会的・労働」——抽象的・人間労働を事実上把握していたものとする理解には首肯し

えない。というのは、われわれがこれまで行論のうちに明らかにしてきたように、またすぐ後に必要かつ十分な論証を試みるように、両価値規定はただ単に「並列」されているのではなく、彼がまさにあらゆる社会に共通する人間と自然との物質代謝過程を交換過程化して理解することによって、両者は重層的なものとしてとらえられうるからである。

また、右の藤塚氏の見解にたいして、岡崎栄松氏はその著『資本論研究序説』(日本評論社、一九六八年)で、スミスは「価値の実体把握をこころみている」だけで、それに「成功していない」(三三頁)との批判を加えておられる。しかし、岡崎氏の批判的視角の立脚点そのものに、重大な過誤がみられる。氏は、先に引用したマルクスの一文——「私の労働または私の商品にふくまれている労働もまた、すでに社会的に規定されており、その性格を本質的に変えているということとは、アダムには見落とされている」という一文に依拠しつつ、次のように主張されるのである。すなわち、スミスは「私の労働それ自身が、あるいは私の商品に包含されている労働そのものが、すでに社会的に規定されていることを見逃している」(二二頁、傍点原文)と。しかし、われわれはすでに行論のうちに明らかにしてきたように、諸商品の価値の実体としての投下労働そのものを当初から「労苦や煩勞」、「安楽と自由と幸福の犠牲」としてとらえ、諸商品の交換以前にすでにあらかじめ個人主観的に同質なものとして設定していたのは、まさにスミス自身ではなかっただろうか。氏の理解はわれわれとはまったく逆の理解をしめすこととなっているのである。しかし、氏は先に引用したマルクスの一文に依拠しつつ展開しているのみで、なんら、より具体的な論証を試みていないので、われわれとの見解の相違をさらに明確にすることができないのであるが、おそらく、先のマルクスの一文に対する解釈の思い違いがあるように思われる。したがって、われわれとしては、藤塚氏の見解と同様、岡崎氏の見解にも首肯しえないのである。

われわれはここで、スミスによるいわゆる二面的な価値把握が次のような関係においてつかまれていたことをもう一度想起しなければならない。すなわち、支配労働量による商品の価値規定は、彼のいわゆる「商業社会」において商品所有者が相互に社会的に関連する仕方そのものの、つまり

商品交換の側面のみを抽象してとらえられたものであり、そして、この対社会的な関連のもとでとらえられうる支配労働価値説は、自然と人間との関係、つまり対自然的な関連のもとでとらえられた投下労働価値説に基礎づけられることによって、いわゆる二面的な価値把握がなされていたのであった。

ところで、このように、スミスにあって支配労働量と投下労働量というまったく相反する価値規定の構成となりえたのは、いいかえるならば、投下労働価値説が支配労働価値説にとって基礎ないし前提とされる関係において両立するものとして構成されていたのは、いかなる根拠によってであるかといえ、それは、支配労働価値説の前提となっている投下労働価値説そのものがすでに対自然的な関係を、つまりあらゆる社会に共通する自然と人間との物質代謝過程を、商品交換の関係としてつかまえていたからにはかならない。つまり、両価値規定はただ単に、前者は対社会的な関連、後者は対自然的な関連という相違をもつのみで、商品交換の関係としては一様に、統一的に理解し説明しえたのである。したがって、スミスがこの第一編第五章において投下労働量と支配労働量というまったく相反する仕方によって価値の規定をおこっていたということは、彼自身にとってはなんら矛盾となるものではなく、まさに、両者は重層的な関係となつてつかまれていたのである。

かくしてわれわれは、スミスがあらゆる社会に共通する自然と人間との物質代謝過程を商品交換の関係として、交換過程化して理解していたというところ、このことが彼の重層的な価値把握を可能とさせた究極の理論的根拠となつてゐることを、必要かつ十分な意味においてみてとることができたであらう。

そればかりではない。スミスは第一編第六章にはいると、すなわち、考察対象が「初期未開の社会」から「資本主義社会」になると、これまでの重層的な価値把握に対して、もはや投下労働価値説は貫徹しえずに支配労働価値説のみが唯一の価値基準であるとの見解をしめすこととなるのであるが、実は、先の理論的根拠そのものは、スミスにこのような価値把握の転回を可能とさせた究極の理論的根拠ともなっていたのである。次にその点を明らかにしよう。

第二節 投下労働価値説の放棄と

支配労働価値説への移行

——第一編第六章の検討——

〔一〕 第一編第六章にはいると、第五章でとらえられた重層的な価値把握は「労働の全生産物が労働者に属する」(W. o. N. vol. I, p. 49. 訳(一八六頁))ところの「資財の蓄積と土地の占有との双方に先行する初期未開の社会状態」(ibid. p. 49. 訳(一八五頁))においてのみ妥当するものであるとされ、「資財が特定の人びとの手に蓄積され」(ibid. p. 50. 訳(一八六頁))、「土地がすべて私有財産」(ibid. p. 51. 訳(一八九頁))となるやいなや、事情は異なるものとされるのである。すなわち、彼は次のように言う。

「資財が特定の人びとの手に蓄積されるや否や、かれらのなかのある者は、勤勉な人々を就業させるために自然にそれを使用し、かれらの所産を売ることによって、あるいは、かれらの労働が原料の価値に付加するものによって利潤をあげるために、かれらに原料や生活資料を供給する

ようになる。……それゆえ、職人たちが原料に付加する価値は、このばあい二つの部分にそれ自体を分解するのであって、その一つはこれらの賃銀を支払い、他は雇主がまえ払いした原料と賃銀との全資財に対する利潤を支払うのである」(ibid. p. 50. 訳(一)一八六―七頁)。

「ある国の土地がすべて私有産 (private property) になるや否や、地主たち (landlords) は、他のすべての人々と同じように、自分たちが種をまいたこともないところで収穫することを好み、その自然の生産物に対してさえ地代を要求するのである。……いまやかれは、これらを探取するための許可に対して支払わなければならないし、しかもかれは自分の労働が収集または生産したものの一部を地主にひきわたさなければならぬ。この部分の価格が、土地の地代を構成する……」(ibid. p. 51 訳(一)一八九―一九〇)、と。

みられるように、スミスの考察対象が「初期未開の社会」から資本主義社会になると、直接的生産者としての労働者の生産した「労働の全生産物」のうち、そのすべてが労働者に帰属するのではなく、それらのうちの一部分が賃銀として与えられるにすぎず、残余の部分は資本家と地主とにそれぞれ「利潤」・「地代」として分与されねばならないものとする。つまり、スミスはここにいたって、直接的生産者としての労働者が原材料に付加したところの価値は、「賃銀」、「利潤」、「地代」という三つの部分に分解するものとするのである。

ところでこのように、「賃銀」、「利潤」、「地代」が商品価値の三つの「分解」部分であると解されていたかぎりにおいては、スミスが「剰余価値、すなわち、遂行された労働でしかも商品に実現されている労働のうち、支払われた労働をこえる、——(つまり)その等価を賃銀で受け取った

労働をこえる——超過分たる剰余労働を、一般的範疇としてつかみ、本来の利潤および地代はそれの分身にすぎない」(Mw. Bd. I, S. 53. 訳(一)一三〇頁)ものとしてとらえていたことをしめすものにはかならない。いしかえるならば、それは、資本主義的生産関係のもとも、一応投下労働量による商品の価値の規定を保持していることを意味するものであり、そしてそのかぎりにおいて、剰余価値を「一般的範疇」として正しくとらえる視点があったものといえよう。しかし、このような視点は、スミス自身にあってはあくまで萌芽であるにすぎず、基本的には次のような見解へと傾斜してゆくのである。

「こういう事態のもとでは、労働の全生産物は必ずしもつねに労働者に属さない。……また、こうなると、ある商品の獲得または生産にふつうついやされる労働の量は、その商品がふつう購買し、支配し、またはこれと交換されるべき労働の量を規定しうる唯一の事情ではない。賃銀をまえ払いしその労働の原料を提供した資財の利潤に対してもまた、当然追加量 (additional quantity) が支払われなければならないのは明白である」(W. o. N., vol. I, p. 51 訳(一)一八九頁)。

「価格のすべてのさまざまな構成部分の実質価値は、そのおのおのが購買または支配しうる労働の量によって測られる」ということである。労働は、それ自体を労働に分解する価格部分の価値を測るばかりではなくそれ自体を地代に分解する価格部分の価値およびそれ自体を利潤に分解する価格部分の価値をも測るのである」(ibid. p. 52. 訳(一)一九一頁)、と。

ここにおいては、「賃銀」、「利潤」、「地代」が商品の価値の三つの分解部分であるとされていた先の見解はまったく影をひそめ、先に三つの部分に分解されるものとされていた価値の実体としての投下労働量そのものの

は、ただ単に「賃銀」部分のみをあらわすものにすぎないものとされ、他面、「利潤」、「地代」部分は、「賃銀」部分のみをあらわすにすぎない投下労働量のほかに、さらに「追加」されたものとして処理される関係となっている。そしてさらに、このように事実上「賃銀」「投下労働量」、「利潤」および「地代」||「追加分 (additional quantity)」として把握された三つの部分は、それぞれにそれと価値において等しい「労働を支配」することができるとされ、それゆえ、「賃銀」「利潤」「地代」のそれぞれの「実質価値」は、「そのおのおのが購買または支配しうる労働の量によって測られる」ものとするのである。ここにいたってスミスは、明らかに循環論法に陥ることとなっているが、しかし、それはともかくとして、彼はこのような理解を基礎とすることによって、次のような結論を導びきだすことになる。すなわち、このような事情のもとにおいては、ある商品の「生産に必要な労働量」(「投下労働量」)は、もはやその商品が「支配しうる労働量」を規制する「唯一の事情」ではなく、「支配労働量」のみが唯一の価値尺度である、と。こうしてスミスは、考察対象を「初期未開の社会」から資本主義社会に移すと、そこにおける価値の規定はその商品を「生産するに必要な労働量」によってではなく、その商品が「支配しうる労働量」によってきまるものとするにいたるのである。^(註)

(註) ここで注意されなければならないことは、第一編第五章での考察対象、すなわち彼のいう、いわゆる「初期未開の社会」と、この第六章での考察対象、すなわち資本主義社会との関係についてである。というのは、スミス自身のなかにおいて「初期未開の社会」規定の分裂が生じているからである。すなわち、この第六章の冒頭では、「資財の蓄積と土地の占有との双方に先行する初期未開の社会状態のもとでは、さまざまな物を獲得するために必要な労働の量の割合は、これらの物をたがいに変換するためのある定規 (rule) になりうる唯一の

事情であつたように思われる」(W. o. N., vol. I., p. 99. 訳(一八五頁))として、交換のある社会として想定されていたのに反して、第二編の序論では「分業というものが全然なく、交換もめつたに行われず、あらゆる人が独力であらゆる物を調達している未開状態の社会」(ibid., vol. I., p. 258. 訳(二三頁))として、分業も交換もない社会としてとらえられているのである。われわれは、この分裂した把握をいかに理解すべきであるか。この点については、すでに時永淑氏によって、次のようなきわめて示唆に富む理解がしめされている。「スミスにとって、『資財があらかじめ蓄積されたり、あるいは貯えられたりする』社会、すなわち『資財の蓄積と土地の占有』のみられる社会に先行するものとしてとらえられていたのは、この第二編の指摘からするかぎり、本来的には、自給自足的な形で『未開状態の社会』であつたということになる。そしてまた、この二つの社会形態の区別が、スミスにとつての唯一の歴史的な社会形態の区別であつたということができる。要するに、分業——つまり商品交換を媒介とする社会的分業——と生産物の交換とが行なわれているかどうか、それが社会形態の基本的な差異を生み出す唯一の根拠と解されていたことになる。『資財の蓄積と土地の占有』のみられる社会というのは、スミスにおいては、この分業と交換の拡大過程の極点にあるものとしてとらえられたのである。……このようにみてくれば、第一編第五章での考察の対象は、自給自足的な社会状態のもとで、当初は偶然的に行なわれたところの生産物の交換——これは当初未熟な形で行なわれる社会的分業を基礎とするもの——というところになる——の拡大を、その交換の側面においてのみとりあげたもの——ということができる。つまり、スミスにとっては、本来は歴史上の社会形態の相違を規定するはずの社会的関係がそのものとして問題にされることなく、社会関係は当初からこの生産物の交換の側面においてしか問題にされず、労働生産過程における労働の存在様式が当初から商品交換を媒介とする社会的分業として把握されてしまつていたわけである。……したがって、われわれは次のように言うことがでわかる。重商主義に対するスミスの自然的な立場からするかぎり、スミスにおいては、『文明社会』の本質は、基本的には、交換とその基礎をなす社会的分業とに基づくものとして把握されたものであり、他面において、現実には階級分化の存在を見逃すわけにはいかなかったのである、と。そして、そのために、スミスにおいては、『雇主』階級も、産業資本家階級として、労働者

階級——スミスのいう「職人」階級つまり「勤勉な人々」——との関係を明確にされることなく、彼らの労働の生産物を単に「分けあう」階級として把握されるにすぎず、そのかぎりでは地主階級も同様に把握されることになったのである、と。こうして、スミスにおいては、前者の自然法的立場に制約された形での彼の『文明社会』の把握に対し、後者の現実観察の側面が重複していった二重の関係が、第一篇の第五章と第六章との関係として現われたのであった（『経済学史』、法大出版、一九七一年改訂増補版、二二八—九頁）。少々引用が長きにわたってしまったが、われわれとしても、第一編第五章におけるスミスの考察対象像と第六章におけるその像との関係については、時永氏の右の見解に基本的に依拠せざるをえない。しかし、右のような正しい指摘も、われわれが本稿で意図しているように、第一編第五章において重層的な価値把握を可能とさせた理論的根拠が、いかに第一編第六章および第七章の理論展開を規制し、かつ可能とさせているかの論証を通じて、はじめて完全な意味をもちうるものと思われる。この点はこの行論のうちに明らかとなるであろう。

〔二〕 それではスミスはなぜ考察対象を「初期未開の社会」から資本主義社会へ移すと、投下労働価値説が貫徹しえず、支配労働価値説のみを唯一の価値尺度となしえたのだろうか。つまり、スミスがかかる価値規定の転回をなしえたのは、いかなる理論的根拠にもとづくものであろうか。それは、端的に言えば、スミスによる資本主義的生産関係の把握そのもののなかに伏在しているものといえる。彼はその点について、次のように言う。

「資財が特定の人びとの手に蓄積されるや否や、かれらのなかのある者は、勤勉な人びとを就業させるために自然にそれを使用し、かれらの所産を売ることによって、あるいは、かれらの労働が原料の価値に付加するものによって利潤をあげるために、かれらに原料や生活資料を供給するようになる」(W. o. N., vol. I, p. 50. 訳(一八六—七頁)、と。

みられるように、資財が「特定の人びと」(「資本家」)の手に蓄積されるようになると、資本家に「勤勉な人びと」(「賃銀労働者」)に「原料と

生活資料」とを実物形態で前貸しし、そのかわりに「利潤」を得るものとされている。このことは、とりもなおさず、スミスが資本主義的生産関係をただ単に資本家と労働者との交換の関係として、つまり商品交換の関係にあるものとして、とらえていたことをしめすものにほかならない。だが、いうまでもなく、スミスがここでとらえたように、資本主義的生産関係そのものは、ただ単に資本家と労働者との商品交換関係としてあるものではない。それは、たしかに一面で、スミスのごとく、資本家が労働者に「労働の価値」としての「賃銀」を支払い、その代価として「利潤」を得るという関係として観念される。このばあい、「賃銀」は労働力の価値としてではなく、いわゆる「労働の価値」として現象し、観念されるのであるが、しかし、それはあくまで表象においてとらえられた関係であるにすぎない。それは、厳密に言えば、あらゆる社会に共通する自然と人間とのあいだの物質代謝過程——労働生産過程——を資本の生産過程としておこなわれることから生ずる観念であり、表象であって、したがって、それは単純に資本家と労働者とのあいだにおこなわれる商品交換の関係として把握しうるものではない。社会存続の物質的基礎をなす労働生産過程が資本主義的生産関係をもって遂行されるということは、直接的生産者たる賃銀労働者についてみれば、彼が受けとるところのものはあくまで労働力商品の代価たる賃銀であって、したがって、それは貨幣形態で受けとるのであって、けっしてスミスのごとく、実物形態で「原料と生活資料」とを「前貸し」されるものではない。そして、しかも彼はその貨幣形態で受けとったところの彼の労働力商品の代価たる賃銀をもって、彼が資本家のものとして生産した生活資料のうちの一定量を買戻すことによって始めて、彼自身の労働力の再生産が可能となり、したがって彼の労働力は商品とし

て資本家に繰り返えし販売しうることとなり、したがってまた、社会存続の物質的基礎としての労働生産過程が資本主義的生産関係をもって再生産されうる基礎が与えられることとなるのである。だから、資本主義的生産関係がこのようなものとしてあるかぎり、それをスミスのごとく、ただ単に資本家と労働者との商品交換の関係としてとらえることはできないものといわざるをえないのである。

ところでわれわれはここにいたって、このようなスミスによる資本主義的生産関係の把握が、先の第一編第五章において、彼が対自然的関係そのもの、つまり自然と人間とのあいだの物質代謝過程——労働生産過程——を自然と人間とのあいだにおこなわれる商品交換の関係として把握していた視点を基礎としているものであるということは、容易に推察しうるであろう。すなわち、先の第一編第五章の価値把握においては、労働生産過程は直接的生産者が自己の労働を「本源的購買貨幣」として自然に対して支払い、その代価として「いっさいの物」Ⅱ「生活必需品および便益品」を受けとるという関係において把握されていたのに対して、ここにおいては、直接的生産者のかわりに賃銀労働者が、自然のかわりに資本家が登場するという相違をもつのみで、生産関係そのものはやはり商品交換関係として把握されているのである。いいかえるならば、前者においては対自然との関係、「つまり自然と人間との関係、後者においては対資本家との関係、つまり資本家と賃労働者——人間と人間——との関係という相違をもつのみで、ともに物質代謝過程そのものを商品交換関係としてとらえているのである。^(註)

(註) このような理解は、古くは久留間敏造氏によってもしめされている。その著『経済学史』岩波全書版、一九五四年、九九—一〇一頁の注記を参照せよ。

ここにいたってわれわれは、スミスが考察対象を彼のいわゆる「初期未開の社会」から資本主義社会に移すと、投下労働価値説は貫徹しえないものとし、支配労働価値説のみを唯一の価値尺度とした理論的根拠をみないわけにはいかない。

つまり、スミスはこう考えたのである。

すなわち、対自然的関連のもとでとらえられうる投下労働価値説も、対社会的関連——人間と人間——のもとでとらえられうる支配労働価値説ともに商品交換関係であるというかぎりにおいては一樣なものとしてある、ところで、いまここにおいては資本主義社会、つまり資本家と労働者の再生産——人間と人間——の関係が問題である、したがって、そこにおける価値尺度は対自然的関係のもとでとらえられうる投下労働価値説ではなく、対社会的関連——人間と人間——のもとでとらえられうる支配労働価値説が唯一のものである、と。

かくて、スミスは考察対象が第一編第六章の資本主義社会になると、資本主義的生産関係そのものはただ単に資本家と労働者との商品交換関係であるとの理解を理論的根拠とすることによって、彼自身にあってはなんら矛盾として映ずることもなく、もはや投下労働価値説は貫徹しえず、支配労働価値説のみが唯一の価値尺度である、となしえたのである。

こうして、スミスにあっては、資本主義社会において支配労働価値説のみが唯一の価値尺度であるとされ、そして、この支配労働価値説が根拠となつて、彼は一面において、価値分解説から価値構成説へと進み、彼のいわゆる「自然価格論」への道、つまり価値論なき分配論への移行が生じ、他面において、第二編の「資本蓄積論」へのつながりがみられることとなるのである。^(註)

この点については、第一編第六章の結びの箇處に次のような示唆に富む一文がある。「文明国では、その交換価値が労働だけから生じる商品は少数しかなく地代と利潤とははるか大部分の商品の交換価値に大々的に寄与するのであるから、その国の労働の年々の生産物も、それを産出し、調製し、またその生産物を市場へもたらすのについてやされた労働よりも、はるか多量の労働をつねに購買または支配するにたり得るであろう。もしこの社会が、年々に購買しうるいさゝかの労働を使用するものとすれば、労働の量は年ごとに大いに増加するであろうから、後続するまい年の生産物は先行するまい年のそれよりも、おびただしく大きな価値のものになるであろう。けれども年々の全生産物が勤勉な人々を扶養するために使用される国などというものは一國もない。いたるところで怠け者がその一大部分を消費するのであって、この全生産物がこれらの二つの異なる階級 (order) の人民のあいだに年々に分割されるさまざまな割合に應じてこの全生産物の通常のまたは平均的な価値は、年々に増加するかまたは減少するか、あるいは連年ひきつづき同一であるか、のいずれかになるにちがいないのである」(W. o. N., vol. I, p. 56. 訳(一九九—二〇〇頁)。この一文は、マルクスによつて、一方ではスミス「自然価格」論の「不条理」(Mw. Bd. II, S. 344. 訳(二〇〇頁))をあらわすものとして、さらには他方におつて「蓄積の謎」(Mw. Bd. I, S. 224. 訳(一九二頁))を解くものとして、つまり二重の視角からのアプローチがなされている。このマルクスの指摘は、スミスの理論体系の骨格を知るうえにおいて、きわめて重要な指摘であり、かつ、われわれの検討にとつても指針となりうるものである。しかし、当然のことながら、本稿においては、第一編第六章でとらえられた支配労働価値説がマルクスのいう「自然価格」論の「不条理」へと、いかにつながつてゆくのかの検討のみにとどめ、それが「蓄積の謎」、すなわち第二編の「資本蓄積」論へとつながつてゆくことそれ自体については、別稿に譲ることにした。

第三章 支配労働価値説を根拠とする

自然価格論への移行

——第一編 第七章の検討——

先にもみたように、スミスの考察対象が資本主義社会になると、商品の価値はその商品を「生産するに必要な労働量」によって規定されるのではなく、その商品が「支配しうる労働量」によって規定されうるものとなるのであるが、このことはさらに、スミスを次のような論理へと導く根拠となる。彼は、その同じ第一編第六章において次のように言う。

「賃銀・利潤および地代は、いさゝかの交換価値の三つの本源的な源泉であると同時に、いさゝかの収入の三つの本源的な源泉である」(W. o. N., vol. I, p. 54. 訳(一九六頁))と。

みられるように、ここでスミスが「賃銀・利潤および地代」を「いさゝかの収入の本源的な源泉」であると規定したことは正しいにしても、このことが同時に「いさゝかの交換価値の本源的な源泉」でもあるとするわけにはいかないであろう。いうまでもなく、土地所有と資本所有とは労働生産物の一部分を地代および利潤として要求する社会的根拠ではあるが、しかしそれ自体は決して労働生産物の価値そのものをつくりだすものではない。また賃銀も同様にそれ自身が価値をつくりだすわけではない。価値を創造するのは労働者が生産過程で行なう労働によってであつて、労働者が労働力商品の代価として受けとるところの賃銀ではない。したがつて、基本的関係から言えば、商品の価値はその商品を「生産するに必要な労働量」によって規定されるものとしなければならないのであつて、「賃銀」

は商品化された労働力の価値の転化形態として、また「利潤および地代」はその労働力の価値を超えて創造された価値、つまり剰余価値の資本家および地主への分配諸形態としてとらえられねばならない関係にある。したがって、スミスがここで「賃銀・利潤・地代」を「いっさいの交換価値の本源的な源泉」としたことは表象にあらわれるがままの現象形態に目を奪われた見解、つまり価値構成へと移行していったことを如実に示すものにはかならない。事実、彼はこのように「賃銀・利潤・地代」という三要素のそれぞれが独立に商品の「交換価値の本源的な源泉」としたのちにおいて、第一編第七章「諸商品の自然価格および市場価格について」の冒頭で次のように言う。

「あらゆる社会またはその近隣には、労働や資財のさまざまな用途ごとに、賃銀と利潤との双方についての通常率または平均率 (ordinary or average rate) というものがある。……また同様に、あらゆる社会または近隣には地代の通常率または、平均率というものがある。

これらの通常率または平均率は、それがふつう広く行なわれているところでの、賃銀・利潤および地代の自然率 (natural rate) とよんでさしつかえなかるう。

ある商品の価格がそれを産出し、調整し、またそれを市場へもたらすために使用された土地の地代と、労働の賃銀と、資財の利潤とを、それらの自然率にしたがって支払うのに十分で過不足がないばあいには、このときその商品は、その自然価格へ (natural price) とよばれるべきもので売られるのである」(W. o. N., vol. 1, p. 57. 訳(一〇一—一頁))と。

つまりここにおいてスミスは、商品の価値は「賃銀・利潤・地代」の三

要素によって構成されるものとする先の価値構成説を前提とし、そしてこれらの価値構成の三要素としての「賃銀・利潤・地代」はそれぞれ独立に「平均率」あるいは「自然率」が与えられるものとし、そしてさらにその「自然率」をもった各部分の総計がとりもなおさず「自然価格」であるとするのである。

われわれはここに、価値と価格との本来の関係が完全に顛倒されて、価値概念そのものが「自然価格」概念によって代置されているのを見てとることができよう。すなわち、スミスが価値構成の三要素として「賃銀・利潤・地代」をとらえていたこと自体、勿論誤りであるが、その上さらに、各々が一樣に「自然率」をもつものと規定している点も、本来的には決してそのようなものとしてはない。いうまでもなく、「賃銀」は商品化された労働力の価値の転化形態としてあり、したがってそれは、端的には価値形成増殖過程に即して、またその完全な規定性においては資本の蓄積過程に即して規定されうるものとしてある。また他面、「利潤・地代」は「賃銀」とは異なっており、商品化された労働力の価値を超えて創造された価値つまり剰余価値の資本家および地主への分配諸形態として、その意味において本来の分配諸範疇として規定されねばならない関係にある。したがって、「賃銀」も「利潤・地代」も、それぞれ一樣に「自然率」が与えられるものと規定するわけにはいかないのである。この意味においてスミスは、「まさに労賃などはいくらいくら、一般的利潤率はいくらいくらになる」(Mw. Bd. II, S. 216. 訳(三八六頁)) というように「自分の商品の費用価格を決定する個々の資本家の、資本主義的生産の当時者の、立場に立っている」(同前頁)のである。いいかえるならば、ここにいたってスミスは、投下された労働量とは完全に切断された形において、つまり価

価値論なき分配論に墮つてしまふのであって、こうして一面で「俗流経済学に広く門戸を開放」(K. Bd. II, S. 375. 訳(四八五頁))することとなつたのである。

しかしながら、ここにおいてわれわれは、スミスのこのような価値と価格との顛倒、価値論なき分配論という現象的側面に目を奪われた見解、すなわち投下労働量とは完全に切断されたかたちにおいて把握された「自然価格」論について、それをマルクスの如く、ただ単にスミスの「皮相的な」把握様式であるとして放置してしまふのではなく、まさにスミス自身の価値把握にあっては当然の帰結であつたという点をみるべきであろう。すなわち、これまでみてきたように、彼の「自然価格」論には、支配労働価値説を根拠とする価値構成説が前提されていたのであり、そしてこの支配労働価値説そのものは、第一編第六章の資本主義社会において、唯一の価値基準とされていたのであつた。それではなぜ資本主義社会において支配労働価値説のみが唯一の価値基準とされたのであるかといえ、それはまさに、資本主義的生産関係そのものを資本金と労働者との交換関係として、交換過程化して理解していたからであつた。そしてしかもこのように、生産関係そのものを交換過程化して理解すること、このことは、第一編第五章の「初期未開の社会」において、投下労働価値説と支配労働価値説との重層的な価値把握を可能とさせた理論的根拠、すなわち、あらゆる社会に共通するところの自然と人間との物質代謝過程＝労働生産過程を商品交換の関係として交換過程化して理解していた視点と共通するものであつたのである。

かくして、ここにおいてわれわれは、当初における投下労働価値説と支配労働価値説との重層的な価値把握そのものが、彼の価値論全体の構造を

重層的ならしめている点をとることができると同時に、このことを可能にした究極の理論的根拠として、労働生産過程を交換過程化して理解していた視点が横たわっていることをも看取しえたであらう。

結語

以上われわれは『諸国民の富』の第一編第五章、六章、七章にわたって展開されているスミス価値論の基本構造を検討してきたのであるが、そこでは、当初における重層的な価値把握が、すなわち、投下労働価値説を基礎ないし、前提とし、それを支配労働価値説で補完ないし、いわば外枠となる関係においてつかまれた価値把握が、彼の価値論の全構造をも重層的ならしめているということをもてとることができた。そしてしかも、このようなスミスの重層的な価値論展開が可能となりえた究極の理論的根拠はいかなる点にあるかといえ、それは、彼があらゆる社会に共通するところの人間と自然との物質代謝過程、すなわち労働生産過程を商品交換関係として、交換過程化してとらえていたからであつたということをもみてとることができた。

ところでこのことを、学説史の流れのなかでみるならば、一面で、彼がこのように労働生産過程を交換過程化して理解していたがゆえに、ペティ以来の土地と労働による二元論的な価値把握を一元論化したものであつたということができよう。すなわち、このような労働生産過程の交換過程化によって、投下労働そのものが、当初から「労苦や煩勞」、「安楽と自由と幸福の犠牲」として、個人主観的に同質なものとしてつかまれることとなり、したがって、その商品に投下された労働が即目的に社会的労働一般として設定され、したがってまた、諸商品の交換以前に同一量の労働が常に同一量の価値をもつものとして規定されることとなつたのである。こう

した価値規定の一元化によって、すでにみたようにスミスなりに、一応の形においてであるが、経済理論として統一的体系構成をもちうることとなったのである。ところがこれとは対照的に、フランクリンの場合には、スミスと同じように労働によるその一元化が行われながら、単にそれが流通表面のみを通して抽象されたために、経済理論としての体系構成にとって何んら役立ちえないものであったのである。したがって、スミスが労働生産過程を交換過程化してつかんでいたということ、このことがまさに学説史の流れを画期する意義をもつものであったということができよう。

だがこの意義は同時に、反面において、価値形態論の欠如、貨幣把握の一面性、すなわち流通形態論の独自性が把握されえないという理論的代償をもたらしたのであった。いいかえればこのことは、社会存続の物質的基礎としての労働生産過程がそのものとして純粹なかたちで析出しえなかったということを意味するものにほかならない。このため、すでにみたような重層的な価値論展開となつて、必然的に現われざるをえなつたのである。

リカードは、すでによく知られているように、このスミスの重層的な価値論を授下労働価値説の側面から、一面的に純化したのであった。だがこのリカードによる純化も、スミスの基本的視点、すなわち労働生産過程の交換過程化を自明のこととして前提し継承していたために、スミスと同様の理論的欠陥がより鮮明に露呈することとなつたのであった。したがって、古典派経済学の完成者としてのリカード理論体系にとつても、このような労働生産過程の交換過程化はその理論的展開を根底的に制約することとなつていたのである。したがってまた、この労働生産過程の交換過程化というスミスの基本的視点の理論的解明なしには、古典派経済学体系を止揚す

る方向において、労働価値説の純化を行うことはけつしてなしうるものではなかつたのである。

マルクスの理論体系はこの点の根本的な解決によって成り立っているといてよいのであるが、しかしそのマルクスにしても、『資本論』冒頭において、周知の「蒸溜法」といわれる二商品間による労働価値説の論証にみられるように、そこにはいまだ古典派の残滓を包含するものであった。この点のさらなる純化は今後の課題とせざるをえないが、それはともかく、これまでみてきたように、理論の発展・継承関係は労働生産過程の交換過程化というスミスの基本的な視点をいかに解決してゆくかを中心基軸にして展開されてきたものと解してよく、この意味において、スミス理論体系の学説上の評価も、この点の検討なくしては正しく位置づけえないものといえよう。

(一九七一・二・二八記)